

◆ギンジック恭子さんのエッセイ「スイス家庭事情の変遷」は興味深かった。以前うかがった事柄からは隔世の感があったからである。今回、子育ても含め、質実剛健なスイスの変化がとも面白く感じた。やはり世界は動いているのである。今号、新関伸也さんの〈近江気まぐれ文学抄〉はお休みです。

◆生まれ育った町で始まった「こども食堂」に参加している。が、コロナ禍でいまは休止中。当初からお年寄りもウエルカムで、名前には「地域食堂」を冠する。「食べること」「遊び学ぶこと」「居場所づくり」という理念を掲げている。二〇一九年四月に設立された地域食堂の活動は準備期間を経て、八月一日に第一回目を開いた。それから二週に一度、来る人も徐々に増え、時には地元の高校生のボランティアの参加もあって順調に回を重ねていくように思われた。しかし、中心になって活動していた副代表の女性Mさんの病気がわかり、半年の闘病ののち、帰らぬ人となった。並行するように、新型コロナウイルスが脅威となった。その後も消毒を徹底して食堂を開いていたが、いつも来てくれるお年寄りに何かあっては、とのことではしばらく休むことになった。

Mさんは県外から来た、いわゆる「よそ者」だった。よそ者にはしがらみがないぶん、思ったことを口にできる強さがある。生来の強い正義感と行動力により、地域でリーダーとして活躍してきた人だ。Mさんは湯浅誠さんのこども食堂の講習に参加し、数人で東京の池袋や山形市のこども食堂を見学に行き、さらに町長やすべての小学校・中学校へのあいさつと精力的に動いたという。

こども食堂の話聞いたとき、すぐに手伝いを申し出た。自分の子育ての反省からである。東京郊外で子育てをしたわたしは、かなりの部分、友人や地域の人たちに助けてもらった。自分とはなるとか乗り切ったものの、もっと心配な家庭があったのも事実。自治体の福祉からは漏れるような例だったかもしれない。あのときこども食堂があったなら、少しはお互いに楽に集まれたのではないか、と思う。せっかく始めた地域食堂、なんとか再開の道を探っていききたいものである。

(布宮慈子)

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。
61号からのバックナンバーも読むことができます。

季刊展景
103号

二〇二一年十月二十日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二―一―七―二〇二

info@muninokai.com